

政策情報の物語化が受け手の態度変容に与える効果に関する実証的研究

高橋祐貴¹・川端祐一郎²・宮川愛由³・藤井聡⁴

¹学生会員 京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻（〒615-8540京都市西京区京都大学桂4）

E-mail:y.takahashi@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

²学生会員 京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻（〒615-8540京都市西京区京都大学桂4）

E-mail:kawabata.yuichiro.78m@st.kyoto-u.ac.jp

³正会員 京都大学大学院助教工学研究科都市社会工学専攻（〒615-8540京都市西京区京都大学桂4）

E-mail:miyakawa@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

⁴正会員 京都大学大学院教授工学研究科都市社会工学専攻（〒615-8540京都市西京区京都大学桂4）

E-mail:fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

個人では解決不可能な社会に生じる問題を解決し、社会全体の便益増進の為に公共政策が果たす役割は大きいと考えられる。政策遂行には人々の政治心理を醸成し、活発な議論が行われることで円滑な合意形成が図られることが望ましい。

本研究では、近年物語が従来の文学等の領域のみならず、社会心理学や医療分野等においても研究対象とされ実践的に活用されつつあることに着目し、物語型情報を政策コミュニケーションに応用する事を企図した。そして、物語型情報の性質・構造および受け手側の物語に対する志向性が政治心理に与える影響についての仮説を措定し検証を行った。

結果、テキストの性質・構造および物語志向性が政策コミュニケーションの効果に影響を及ぼす事、その効果は物語志向性に影響を受けている事等が示唆された。

KeyWords:narrative,consensusbuilding,communication,publicpolicy

1.背景・目的

(1)公共政策における合意形成手法の検討の重要性

社会には、社会保障や安全保障などの個人では解決することが難しい公共的な問題が存在する。公共政策とは、こうした公共的問題に対処するための、解決の方向性と具体的手法とされており¹⁾、主として国や地方自治体の行政によって人々の長期的、広域的な便益の増進を目的として実施されるものである。例えば、公共政策として行われる社会基盤整備についてみると、ダムや堤防などの整備は防災政策の観点、鉄道や道路、空港、港湾などの整備は交通政策および経済政策の観点において、その役割を担うものである²⁾。一方で、公共政策は社会全体の便益の増進を企図するが故に、その実施過程において、次のような問題が生じることがしばしば指摘されている。一つは、公共政策は往々にしてプロジェクトが大規模になることから、政策目標の選択から具体的な施策の選択に至るまでの様々な段階において、政策当局および多数の利害関係者が登場することとなり、それ故、関係者の総意を得ることは容易ではない、という問題である。そ

して、このような状況下で決定される公共政策は、問題解決のための最適なものではなく、一部の政策当局および関係者の利害調整の末に選ばれたものになってしまう恐れがある。他にも、公共政策は大規模であるが故に、プロジェクト期間が長期にわたることが多く、時間の経過とともに変化する社会情勢に影響を受けやすく、その結果、当該政策の意義に関する議論が置き去りにされたまま、人々の政策に対する心理や態度が変化してしまう恐れがある、という問題がある。実際に、1952年から計画されていた八ツ場ダムの建設は、2009年の政権交代によって誕生した政権与党の「コンクリートから人へ」というスローガンの元でその事業の中止が表明された³⁾。

こうした問題が生じる背景として、公共政策に内在する長期的、公的な利益と短期的、私的な利益が相反するという「社会的ジレンマ」の存在が指摘されている⁴⁾。このジレンマ状況下において、社会全体の長期的な便益の増進をもたらす公共政策を推進する為には、個々の公共政策の内容の適切さに関する議論が必要であることは論を俟たないが、そうした議論の前提として、当該政策に対する人々の関心や当該政策によってもたらされると期

待される社会的便益への理解といった「政治心理」の醸成が必要不可欠といえよう⁵⁾。

ここで、人々の政治心理の形成には、行政やマスメディアの情報発信、コミュニケーションが影響を及ぼしていることが既往研究において指摘されている。例えば、田中らはマスメディアの報道内容によって公共政策に対する否定的なイメージが形成される可能性を実証的に示している⁶⁾。また、羽鳥らは政府の公共事業に関わる政治的・行政的論点に対する人々の賛否意識に関して、マスコミ報道が個人の潜在的賛否規定要因に対する影響を通して、個人の賛否意識にも影響を与えるという心理的因果プロセスの存在を実証的に明らかにしている⁷⁾。

以上の議論を踏まえれば、如何なる形式の情報発信やコミュニケーションが人々の政治心理に影響を及ぼさるか、という点を理解することは、公共政策における合意形成や意思決定のあり方を考える上で重要な意味を持つものと考えられる。

(2)物語の政策コミュニケーションへの応用可能性

近年、社会科学諸分野においては、人間の心理や行動、社会現象を分析するための手法として、物語（ナラティブ）の概念に対する注目が高まりつつある。先行研究では、物語が「関心の強化」、「批判的思考の抑制」、「記憶・想起の向上」、「思い込みの除去」といった様々な効果を有することが実証されている^{例えは8),9),10)}。さらに、臨床心理学や経営学の分野においても、このような物語の効果に着目し、物語型の情報を実践の場に活用している^{例えは11),12),13)}。

これらの物語についての基礎的研究やその実践的試みを踏まえるならば、物語を用いたコミュニケーションは、公共政策における望ましい政治心理の醸成を企図する上においても、効果的な影響を及ぼすことが期待される。

川端ら(2014)は、この点に着目し、物語を公共政策コミュニケーションに活用した際の効果を定量的に計測するために、リニア新幹線を題材として、物語性の強い政策シナリオと弱い政策シナリオを被験者に与え、両者の読了後のシナリオの情報に対する印象の鮮明さ、納得感、関心、当事者意識（以下「シナリオ読了効果」という）を比較する実験（以下「シナリオ実験」と言う）を行った¹⁴⁾。その結果、物事を物語的に伝えたり、受け止めたりする心的傾向である「物語志向性」が高い人は、物語型情報に触れた場合に、そうでない情報（この実験で用いたのは、説明型の情報）に触れた場合と比べて、シナリオ読了効果が増大する、という興味深い知見を得た。

しかしながら、当該実験においては、個人の志向性に関わらず、物語型情報がシナリオ読了効果の増大に有効であるという点については、実証には至っていない。また、物語能力を測る指標として尺度化した物語志向性に

についても、信頼性分析の結果、一部の低位尺度の信頼性係数が低く、更なる実証的検証の余地が残されたものと考えられる。

(3)本研究の目的

本研究では、以上の問題認識のもと公共政策に大きな影響を及ぼし得る人々の政治心理の形成における、物語型コミュニケーションの有効性を改めて明らかにすることを目的とするものである。

より具体的には、川端らの実証研究で残された課題を踏まえ、既往研究から物語に必要な文章構造や要素を検討した上で、公共政策に関する「物語型シナリオ」を作成し、以下の点を実証的に検証するものである。

①人は物語型の情報に触れることで、あたかもその状況を体験しているかのように感じるなどの効果がある「物語モード」に入り込み、結果として、その物語の主題に対する納得感や関心などが高まる、という情報処理プロセスの妥当性

②読者を物語モードに入り込ませる効果の高い（すなわち、物語性の有る）シナリオの形式的特徴

2.既往研究と本研究の理論仮説

(1)物語の定義および認知能力に関する既往研究

物語の定義については、様々な見解が示されている。例えば、野口¹⁵⁾は、物語の最低限の要件を「複数の出来事が時間軸上に並べられている」ことであるとしている。出来事の時間軸に基づく配列についての考察は古くから行われており、例えば、アリストテレース¹⁶⁾は、悲劇を「一定の大きさをそなえた完結した一つの全体としての行為の再現である」と定義し、その全体とは「初め、中間、終わり」という時間軸に沿った構造のことを指している。一方で、時間軸や時間秩序を前提としない定義としては、やまだ¹⁷⁾の、物語は「2つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」というものがある。ここでは、出来事の結びつけ方によって物語の持つ意味が変容し、新たな物語が生まれることが重要であるとされている。さらに、時間と意味の双方に注目した定義として Hinchman&Hinchman¹⁸⁾は、物語は「出来事を、意味に満ちたやり方で結びつける明確な時系列を持ち、一定の聴き手に対して、世界の存在や人々の経験についての洞察を提示するような言説」であるとしている。ここでは、年代史や歴代誌のように時間軸に沿って何が起きたかを述べているだけでイベント間の関連、流れを示していないものは、厳密な意味での物語とはみなせないと述べられている。この他に、神話学者 Campbell¹⁹⁾は神話に共通する「非日常的局面への旅立ち、問題の発生とその解決

の連続、日常世界への帰還」という構造を見出しており、これもある種の物語の形であると言える。

一方、認知的側面からからの物語研究を行った Bruner²⁰⁾は、人間の認知能力における物語の役割を研究するためのアプローチとして、互いに還元不可能な2つの思考様式を提案した。1つは、論理-科学的思考様式であり、それは、「良い理論、簡潔な分析、論理的証明、妥当な議論、理路整然とした仮説に導かれた経験的発見」をもたらすとされている。もう1つは、物語様式（以後、「物語モード」とする）であり、このモードにおいて人間は「みごとなストーリー、人の心を引きつけるドラマ、（それが真実ではないとしても）信じるに足る歴史的説明」を経験するとされている。ここから、読者を物語モードに引き込むような文章を物語と定義することも可能であるように考えられる。

Labov&Waletzky²¹⁾は、物語を「経験を要約する言語表現手法であり、特にその経験の時系列に沿って構成する手法」であるとみなし、共通する構成要素として、「1, Abstract（ナラティブの主題に関する要約の提示）、2, Orientation（時間、場所、状況、そして登場人物の提示）、3, Complicating Action（何が起きたかという出来事の記述）、4, Evaluation（出来事の意味と重要性への言及）、5, Resolution（最終的に何が起きたかの記述）、6, Coda（物語を締めくくり、視点を現在に戻す結語）」の6つを挙げている。Thomdyke²²⁾は、物語に共通する要素が存在するという Labov&Waletzky の考え方を基に、ストーリー・グラマー論を提唱した。ストーリー・グラマーとは、おとぎ話から人々の日常の語りに至るまで、多くの物語には必須の構成要素や配列方法などの共通の規則のことである。実際に、昔話・神話・童話などの文章の構造分析に基づき、それらのプロットがある規則に従って展開されていることが指摘されている¹⁹⁾²³⁾。そして、ストーリー・グラマー理論は、このような規則に沿った文章はそうでない文章に比べて、理解や記憶を向上させるものであると主張するものであり、Thomdyke は実験においてそのことを確認している。

物語の定義の問題からは若干離れるが、人間が物語を理解する際の表象（心的イメージ）の形成プロセスを明らかにしようとする研究が存在し、物語の本質について考察する上でいくつかの示唆が得られる。テキストを読解する際に、読者は、表層的表象、テキストベース、状況モデルという3つの水準の表象を形成するとされる²⁴⁾。Zwaan ら²⁵⁾は、これらの中で最も深い理解に関わる「状況モデル」が、空間（以後、「空間性」）、因果関係（「因果性」）、意図（「意図性」）、主人公と対象（「主体と対象の同一性」）、時間（「時間性」）という5つの「状況的次元」から構成されていると仮定している。León&Peñalba²⁶⁾は、物語文と説明文における因果

関係の働きに関する研究のレビューを行い、物語文においては「意図性」が重視され、説明文では「因果性」が重視されるとの考えを示している。井関・川崎²⁷⁾は、物語文の読解においては説明文の読解とは異なり、「意図性」が状況モデルの構築に大きく寄与していることを明らかにした。ただし、同実験において、物語文では、「意図性」だけでなく「因果性」も状況モデルの構築に大きく寄与していることを実証的に明らかにしている。その他の先行研究^{例えは28)、29)}では、他の次元に比べて「空間性」が状況モデルの体制化などに有意な寄与を与えていないことを示している。そのことから、井関・川崎²⁷⁾は物語文と説明文における「空間性」の機能の違いを検証し、物語文において、状況理解に対する「空間性」の及ぼす効果は「時間性」や「意図性」に比べて小さかったことを実証的に明らかにしている。

以上にみえてきたように、物語の定義は一様ではなく、研究者によって、様々な解釈が存在している。

(2)物語型コミュニケーションにおける心理学的効果に関する既往研究

物語が人間に及ぼす心理学的効果としては、上述のように、ストーリー・グラマーに沿った文章はそうでない文章に比べて記憶や理解を促しやすいことが実証されている²²⁾他、プロットの組織化の程度や方法が文章の理解や想起に影響を及ぼすことが示されている。

Green&Brook⁸⁾は、物語に引き込まれているときに人の心理は特殊なシミュレーションの状態に移行しているという transportation（移入）理論を唱えた。その理論においては、人が物語に没入することで、物語られているキャラクターやテーマへの親近感や関心度が高まると同時に、物語の内容の想像に処理資源が使われることで批判的な思考が抑制され、結果として態度変容が生じるとされ、そのことが実証的に示されている。

医療の分野ではナラティブ・ベイスド・メディスンと呼ばれる手法があり、これは事実情報を提示することで患者の心理に変化を与えようとする「エビデンス・ベイスド・メディスン（EvidenceBasedMedicine, EBM）」とは対照的に、心理学や社会学の知見を援用し、患者の語る「物語」に耳を傾け、会話を通じてその物語にセラピストが入り込み、書き換えを支援することで心理的な問題の解決を図るというものである¹⁰⁾。こうした実践からは、物語は他人をより深く理解するための手段になり得ると同時に、思い込みを取り除くための手段にもなり得ることが示唆される。

(3)公共政策への応用に関する既往研究

公共政策における物語の役割を見てみると、藤井(2011)では、意思決定の場面において「人々は、予め持

っている自己物語の一貫性を保つ方向の選択肢が選択される傾向が強くなる、一貫性を破壊する方向の選択肢が選択される傾向が弱くなる、という傾向が強い」ということが示唆されている³⁰。このことから、人々の持つ自己物語が、公共政策の阻害要因となる可能性が考えられる。

また、公共政策が適切に実施されるためには、技術や理論の開発はもちろんのこと、まちを良くしようと考える意志、すなわち「活力」を促すことが最大の課題であるという指摘があり³¹、その課題解消のために物語を活用した実践描写研究が行われている^{例えば³²}。

他に、1.(2)で述べたとおり、川端ら¹⁴は、公共政策を題材として物語型コミュニケーションの効果を実証的に検証し、物語志向性が高い人は、説明文型情報を提示された場合よりも物語型情報を提示された場合の方が、シナリオ読了効果が増大するという知見を得ている。

3.理論仮説

(1)物語型シナリオの定義

このように既往研究の動向から、物語型の情報がインプットされること、および物語モードでの思考を経験することが、様々な場面で有益な効果をもたらすものと示唆されているが、物語の定義は研究者ごとに差異があり、統一的なものは示されていない。しかし、物語をどう定義するかを曖昧にしたままでは、物語がもたらす心理的効果を実証的に明らかにすることも、既往研究で示されている効果を適切に解釈して実践的に応用することも、難しいと考えられる。

本研究では、物語を以下の二つの特徴を持つ文章であると捉えることにする。まず一つ目の特徴としては、具体性や臨場感を有している文章であるというものである。これは、Bruner²⁰が指摘した人間の認識・思考形式のうちの一つである物語モードに入り込ませるような文章を物語と考えるためである。

物語の二つ目の特徴としては、文章全体があるプロットにしたがっているというものである。プロットとはいわゆる筋立てのことで複数の出来事の間接的関係を示すものであり、物語は、プロットによって意味付けがなされると指摘されている¹⁵。言うまでもなくプロットは多様であるが、ある程度一般化する試みも既往研究において存在している。例えば前述の、Thomdyke のストーリーグラマーや Labov&Waletzky のストーリーの基本形式は、物語の典型的なプロットを示したものである。また、アリストテレスの悲劇における「始まり、中間、終わり」という形式や、Campbell の神話における「旅立ち、イニシエーション（通過儀礼）、帰還」という構造も物語の典型的プロットであるとみなすことができる。本研究で

は、物語型情報が典型的に持つプロットの1つの形式として、「目標達成-英雄物語型」に注目する。

さて、以上のような物語の特徴を文章上で実現するために、物語を構成する要素についても考える必要がある。そこで本研究では、前述の物語の定義の中から「状況モデル理論」に基づき検証を行うことにする。状況モデル理論とは、前述のとおり、文章理解の次元として、「主体と対象の同一性」、「時間性」、「空間性」、「意図性」、「因果性」の5つが仮定でき、読み手はこの次元に従ってテキストの情報を処理するというものである²⁹。この5つの次元のうち、「空間性」は、「時間性」、「意図性」に比べて状況理解に及ぼす負荷は小さいことが指摘されており²⁷、これ以外にも、状況理解における「空間性」の効果は不安定であるとの報告がなされている²⁸。「因果性」については、León&Peñalba²⁶が、物語文では「意図性」が、説明文では「因果性」がそれぞれ重視されるとの考えを示している一方で、井関ら²⁷は、物語文においても「因果性」が重視されていることを実証していることから、「因果性」が物語文と説明文を分かち基準として決定的な要素であるとする根拠は乏しいものと考えられる。

以上より、5つの次元のうち、「空間性」、「因果性」を除く「主体と対象の同一性」、「時間性」、「意図性」が物語性の要素として特に重要であるものと考えられる。そして、これら3要素のうち、「時間性」を物語の要素として扱うことに関しては、前述の既往研究^{例えば¹⁵, ¹⁸}において、物語の定義や構造として時間的秩序を重視していたことから妥当性が高いものと考えられる。また、「意図性」を物語の要素として扱うことに関しては、Bruner が、物語とは登場人物の「意図」の転換を取り扱うものであり、意図は他のものに還元不可能な「根源的な単位である」として、意図の描写を重視したこととも一致する²⁰。ここで、文章において、「主体」なくしてはその「意図」が描写できないこと、また、「意図」が描写されない「主体」は、例えそれが「人物」であったとしても、物語においては「主体（サブジェクト）」とは言えず、単なる「物体（オブジェクト）」と捉えられるものと考えられることから、本研究では、「主体」および「意図」を合わせて「主体意図性」と捉えることとした。

以上より、本研究では「主体意図性」および「時間性」の二つを「物語性」の主要な要素であると理解し、“「意図をもった主体」が具体的にどのような行動をしたかが、目標達成-英雄物語型のプロットに沿って提示されている”ようなシナリオを「物語型シナリオ」と定義する。

(2)物語型コミュニケーションの効果に関する仮説

ここで、先に挙げた物語の効果に関する実証的な研究の知見をまとめると、ストーリー・グラマー理論によれば、文章の理解や想起への影響、transportation理論によれば、主人公への親近感、一体感や関心の強化および態度変容、そして、心理療法の分野における実践的な知見に基づけば、思い込みの除去、という物語の効果は挙げられる。以上の効果を本研究の目的に照らし合わせると、理解や思い込みが除去されるという効果は、公共政策において、その政策に対する納得感が増進する可能性を示唆しているものと解釈できる。また、親近感・一体感が高まるという効果は、公共政策において、その政策をより身近な問題として捉える傾向が強まる可能性を示唆している。そして、関心の強化は、そのまま政策に対する関心の向上と解釈できる。さらに、物語性を有する記述が記憶や想起に影響を及ぼす背景には、その記述が物語性を持たない記述と比較して、対象者の印象に鮮明に残ることを示唆しているものと解釈できる。

以上のような既往研究の知見を元に、川端¹⁴⁾らは公共政策に関する情報を語型性の強い文章として受け取った場合、政策に対する印象の鮮明さ（「印象鮮明性」）、納得感（「納得性」）、当事者意識（「自我関与性」）、関心（関心向上性）が高まるという仮説（以下、「仮説1」という）を掲げ、検証を行った。その結果、シナリオの物語性から「印象鮮明性」、「納得性」、「自我関与性」、「関心向上性」等のシナリオ読了効果に対して、統計的に有意な効果は検出されなかった。しかしながら、既往研究において実証されている種々の物語の効果を踏まえるならば、本仮説の妥当性を改めて検証することには意義があるものと考えられる。そこで本研究では、主に状況モデル、ストーリー・グラマー理論を参照しつつ、シナリオの物語性を左右する物語要素を改めて検討し、それらの要素をより明確に反映したシナリオを作成し、仮説1の妥当性を再検証する。

その際、シナリオ読了効果は、仮説1で扱った尺度に加え、既往研究⁸⁾から新たに得られた知見として、物語の登場人物に対する好意的な評価（以下、「人物評価」と呼称）および、当該政策に対する関心の程度や必要性の理解、協力的態度（以下「政策態度」と呼称）を加えることとする。なお、既往研究¹⁴⁾においてシナリオ読了効果として定義していた「印象鮮明性」については、後述する「移入尺度」に包含されるものと考え、シナリオ読了効果からは除外することとした。

ついで、本研究では仮説1を基本に再考した仮説1'を掲げ、その妥当性を検証する。

仮説1' 公共政策に関する情報を物語性の強い文章で受け取ると、物語性の弱い文章で受け取った場合と比較して、当該政策に関する人物評価や当該政策に対する納得性、関心向上性、自我関与性や政策受容性が高まる。

さて、川端らの実験においては、シナリオの種類がシナリオ読了効果に与える際にどのような心的過程を経るかについては、明確な仮定を設定していなかった。そこで本研究では、「移入」という概念に着目する。移入とは物語接触時に注意、想像、感情が、物語内で生じている出来事に統合的に融合されるプロセス、と定義される心的現象である。そして、この移入の効果として、自分の現在の状況を忘れて物語世界に没頭し、自分自身もその物語内の出来事を経験しているように感じるようになることによって、物語の主題に対する態度変容が生じやすくなることが示されている⁸⁾。しかしながら、如何なる場合に人々の移入が生じるのか、より具体的には、如何なる要素を含んだ物語が人々の移入に影響しているのか、についての先行研究は、筆者らが知る限り存在しない。また、移入と態度変容の関係性についても、先行条件の知見が十分に蓄積されているとは言い難い。そこで本研究では、以下の仮説を掲げ、物語と移入、態度変容の関係性を検証する。

仮説2 公共政策に関する情報を物語性の強い文章で受け取ると、物語性の弱い文章で受け取った場合と比較して、移入が生じやすく、当該政策に関する人物評価や当該政策に対する納得性、関心向上性、自我関与性や政策態度が高まる。

(3)物語志向性による物語型コミュニケーションへの影響に関する仮説

川端らは、以上に述べた物語型の情報による心理的効果は、全ての人に同じように作用するとは限らず、物語を伝える能力や、物語を理解する能力、物語に対する趣向性、日常生活における物語に対する接触の頻度といった物語に対する個人の資質や経験によって異なると考え、公共政策に関する情報を語型性の強い文章として伝達する効果は、情報の受け手の物語志向性が高いほど顕著に表れる、という仮説3を掲げ、検証を行った。その結果、仮説3は支持されたものの、想定していた物語志向性の4つの尺度のうち、「ナラティブコンテンツ経験度」の信頼性係数が0.279と低い値を示してする余地があると指摘されている¹⁴⁾。

本研究では、物語志向性の尺度を改めて構成し、以下の仮説3¹を検証する。

仮説3¹ 公共政策に関する情報を物語性の強い文章として与えた場合の効果（当該政策に関する人物評価や当該政策に対する納得性、関心向上性、自我関与性や政策態度）は、情報の受け手の物語志向性が高いほど、より顕著に表れる。

4. 仮説検証

(1) 実験概要

本研究で措置した仮説を検証するために、「高知県黒潮町の防災計画」をテーマとする政策シナリオを物語型のもものと説明文型のももの2種類を作成し、その読了効果を計測するWeb調査を行った。実験の流れとしては、まず、被験者のシナリオ読了前後での態度変容を計測するための項目への回答を要請した。次に、シナリオの読了を要請した。最後に、再び態度変容を計測する為の項目、シナリオ読了効果を計測する項目、シナリオの題材に対する移入度を計測する項目、物語型情報に対する志向性の程度を計測する項目への回答を要請した。

(2) シナリオ題材の選定

実験に用いるシナリオの題材には、「高知県黒潮町における防災の取り組み」を採用した。具体的には、佐藤らが現地で黒潮町長や黒潮町情報防災課長といった黒潮町の防災の取り組みにおける主要な役割を担った方々へのヒアリングを行い、その取り組みを物語形式で描写した研究報告³⁹⁾を基に、後述するシナリオ作成の操作に基づき、本研究における物語の定義に沿うような形で変更を加えた。当該テーマを選定した理由は、大規模地震のように発生する可能性はかなり高いと言われつつも、具体的にいつ発生するのかは判然としないものに対する防災においては、広範な合意を長期に渡って持続させるためにコミュニケーション技法を工夫することの必要性が高いと考えられるためである。

(3) シナリオ作成の手順

a) 物語型シナリオの作成

まず、佐藤らの作成した物語描写を元に、各条件のベースとなる共通のシナリオを作成した。佐藤らは、物語の定義を「(有意味な終点に向けて)諸出来事を取捨選択し構造化したもの」としていた。本研究における物語型シナリオの定義である“意図をもった主体が具体的にどのような行動したかが、目標達成-英雄物語型のプロットに沿って提示されているようなシナリオ”に沿うよう

表-1 本実験で使用した物語型シナリオの構造

1	設定：黒潮町の紹介
2	非日常世界への移行：東日本大震災後、黒潮町における南海地震の被害予想が発表される
3	全体の目標設定①（冒険の始まり）：大西町長の決意
4	全体の目標設定②（具体化）：大西町長の紹介と具体的な決意の内容
5	障害発生①：役場の人手不足
6	障害解決①：職員地域担当制
7	障害発生②：防災予算の不足
8	障害対処②：国へのはたらきかけ
9	障害解決②：国の予算の獲得
10	(新たな目標設定と) 障害発生③：「犠牲者ゼロ」へと目標の引き上げ
11	障害対処③：住民1人1人の「避難カルテ」を作成
12	障害解決③：避難カルテの積み上げによる体系立ったシミュレーション
13	全体の目標の達成：「逃げない」から「あきらめない」へ
14	コーダ（締めくくり）：黒潮町ではここ数年で防災意識が非常に高まった
15	現在への視点の引き戻し

表-2 本実験で使用した説明文型シナリオの構造

1	全体の場面設定：黒潮町と大西町長の紹介
2	テーマの導入：東日本大震災後、黒潮町では南海地震に対するあきらめが広がった
3	結論（主張したいこと）：黒潮町ではここ数年で防災意識が非常に高まった
4	取り組み①：職員地域担当制
5	取り組み①の理由および背景
6	取り組み②：国の予算の獲得
7	取り組み②の理由および背景
8	取り組み③：避難カルテの積み上げ
9	取り組み③の理由および背景
10	黒潮町の取り組みを支えるもの（「以上のような取り組みの全てを支える背景として、次の3つを挙げることができる。」との説明を加える）
11	全体的背景1：取り組みを支える「町役場の決意」
12	全体的背景2：「避難放棄ゼロ」という目標
13	全体的背景3：ゆるやかな防災

に、佐藤らの物語描写を情報ユニット毎に分類し、情報ユニットからシナリオを再構成した(表-1)。その際、文章に、行動の主体を明記したり、時間を表す表現を加えるなどの修正を行った。作成した物語型シナリオについては、付録に示す。

b) 非物語型シナリオの作成

非物語型シナリオとして、説明文型の構造を持つシナリオ（以下、「説明文型シナリオ」）を作成した。説明文型の構造を選択した理由は、井関ら²⁷⁾によって物語と説明文における状況モデルの5つの次元の寄与の違いが実証的に明らかにされており、物語文との比較に説明文を用いるのが適当であると判断したことに加えて、住民説明などの公共政策に関する情報伝達には往々にして説明文が用いられており、説明文と比較した際の物語文の効果を実証的に明らかにすることは有益であると考えたためである。

そこで、上述の物語型シナリオの全体の配列を見直し、説明文型の構造になるように再構成した(表-2)。本研究における説明文型の構造としては、“結論としての事実を最初に述べ、次にその理由を述べる”というも

のを採用した。これは、筆者の知る限り説明文についての明確な定義は存在せず、高等学校学習指導要領解説³⁴⁾においては、論理的な文章に説明文が含まれているために、文字通り“結論”を先に述べ、“理由”を続けるという論理的な構造になるようにしたためである。また、井関らの研究に基づいて、文章の表現に関して「時間性」および「主体意図性」を弱める操作を行った。例えば、「2011年3月11日、東北地方を中心とする東日本大震災が発生した。（中略）それから20日後の3月31日、今度は政府の中央防災会議が、南海地震についての被害予想を発表」という表現を「2011年3月11日、東北地方を中心とする東日本大震災が発生した。（中略）3月31日、政府の中央防災会議が、南海地震についての被害予想を発表」とすることで、時間的な表現が弱まると想定した。作成した説明文型シナリオについては、付録に示す。なお、物語型シナリオと説明文型シナリオは、定義以外の差異を最小限に留めるよう留意した。文字数はそれぞれ、2778文字、2758文字である。

(4)調査項目

a)態度変容

シナリオによる態度変容を調べる項目としてシナリオ読了の前後で、「防災関心度」を3項目、「防災政策必要性認識度」を3項目、「許容防災税率」を1項目設定した。「防災関心度」、「防災必要性認識度」に対しては「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの7件法で、「許容防災税率」に対しては、パーセントでの回答を要請した(表-3)。

b)シナリオ読了効果

シナリオ読了効果として、「人物評価」、「納得性」、「関心向上性」、「自我関与性」を各4項目設定し、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの7件法で回答を要請した。

「人物評価」は、「シナリオの登場人物に対してどの程度好意的な評価を抱いたか」が、「納得性」は「シナリオの内容に対する納得感」が、「関心向上性」は「シナリオの内容に対する関心の向上度合い」が、「自我関与性」は「シナリオの内容をどれだけ身近に感じられたか」がそれぞれ反映されるような質問項目から構成されている(表-4)。

c)移入尺度

移入の度合いを計測する尺度としては、先行研究⁸⁾において使用された「TransportationScale」11項目を基に、従来の文学向けのものから今回のシナリオに合うように言葉を改変した、「移入尺度」を用いる。その際には、「大西町長の思いがとてもよく分かった」、「自分も黒潮町の住民の1人であるかのように想像しながら読んだ」などの4項目を追加し、全15項目を設定した(表-5)。

表-3 態度変容に関する質問項目

防災関心度	
1	自分や家族の住んでいる地域の地震対策に関心がある。
2	日本全国の、自分とは関係がない地域の地震対策にも関心がある。
3	地震だけでなく、台風や雪崩などを含め災害一般への対策についても深く知りたい。
防災政策必要性認識度	
1	日本政府は、近い将来の発生が予想される南海トラフ地震(海地震・東南海地震・南海地震)への対策を急ぐべきであると思う。
2	南海地震により30メートルを超える津波が到来するといわれる高知県・黒潮町のような地域に対しては、国が十分な財政援助を行う必要があると思う。
3	災害大国である日本では、政府も国民も、防災には最優先で取り組まなければならないと思う。
許容防災税率	
1	防災予算に関するあなたの考え方について、もう一度お伺いします。今後、仮に「防災税」のような新たな税制が国にけられ、所得のある全ての国民から毎月税金が徴収されて、国各々の防災事業の財源にあてられるとします。手取り給与の何%までなら、「全国の防災」のための徴収に賛成しますか?/%

表-4 シナリオ読了効果の質問項目

人物評価	
1	黒潮町の大西町長は、立派なリーダーであると感じた。
2	黒潮町役場の職員は、公務員としての使命をまっとうしていると感じた。
3	黒潮町の住民たちの努力は、尊敬に値すると感じた。
納得性	
1	この文章の内容は、とても腑に落ちるものだった。
2	この文章は理解しやすかった。
3	この文章について、とくに疑問に思うことはない。
関心向上性	
1	この文章を読む前よりも、地震対策への関心が強くなった。
2	この文章を読んで、黒潮町や大西町長の取り組みについてもっと詳しく知りたいと思った。
3	この文章を読む前よりも、防災は大事だと思うようになった。
自我関与性	
1	この文章を読んで、自分も大地震や津波の危険と無縁ではないだろうと感じた。
2	この文章を読んで、災害のリスクが高い地域のために、自分にもできることがあれば協力したいと感じた。
3	この文章で描かれている黒潮町の困難な状況は、人ごととは思えない。

表-5 移入尺度の質問項目 (*は逆転項目)

移入尺度	
1	この文章を読みながら、黒潮町における出来事がありありと思い描くことができた。
2 *	この文章を読んでいるあいだ、あまり集中できず、自分の周りで起きていることが気になった。
3	まるで自分も黒潮町にいるように感じた。
4	読んでいて、文章に心が引き込まれた。
5 *	読み終えてすぐ、黒潮町のことは忘れて現実に戻ることができた。
6	この文章がどういう終わり方をするのか、読みながらとても気になった。
7	この文章は、私の感情をゆさぶった。
8	ここに描かれているのとは別の展開になる可能性を考えた。
9 *	この文章を読んでいるあいだ、あれこれ考えてしまっただけで集中できなかった。
10	黒潮町での出来事は、私の日常生活にも関係があると思う。
11	この文章に描かれた出来事は、私の人生や生活を変えようと思う。
12	大西町長の思いがとてもよく分かった。
13	自分も黒潮町の住民の1人であるかのように想像しながら読んだ。
14	黒潮町の人たちが、一度は諦めなくなったという気持ちもよく分かる。
15	自分もし黒潮町の住民だったら、津波対策のために何ができるだろうかと考えた。

回答は「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの7件法で行うことを要請した。

表-6 物語志向性の因子分析の結果

質問	F1	F2	F3	共通性
1 簡単な「たとえ話」をすることで、相手にわかってもらえることが多い。	.610	.147	-.062	.437
2 少し経緯がややこしい出来事であっても、全体を簡単に要約して伝えるのは得意だ。	.907	.061	-.205	.753
3 過去の出来事を思い出し、時間の流れに沿ってくわしく説明するのが得意だ。	.878	.000	-.057	.732
4 会話の中で、「おもしろいエピソード」で人の関心をつかむことが多い。	.735	-.089	.190	.628
5 「なるほど！」と思わせるような話の展開や筋書きを考えるのが、我ながら得意だと感じる人が多い。	.765	-.137	.183	.640
6 人に何かを説明するときに、自分の経験談を交えることが多い。	.516	.082	.208	.456
7 「起承転結」や「振り」と「落ち」のように、構成や展開をきちんと意識して話すことが多い。	.792	-.030	-.020	.596
8 人を説得して何かをさせようとするときは、「こうすれば、こうなるだろう」というストーリーを具体的に説明する。	.755	.110	-.076	.605
9 分かりにくい話でも、たとえ話をされると「なるほど」と腑に落ちることが多い。	.202	.368	.007	.456
11 小説を読むとき、登場人物や情景を鮮明にイメージすることができる。	.160	.682	-.149	.244
12 小説や映画などを鑑賞するとき、その作品の世界にどっぷり入り込んでしまう方である。	-.107	.860	-.014	.501
13 人の経験談や教訓を聞いて、自分自身の生活や人生の中でも生かすことができる。	.234	.466	-.006	.661
16 小説や映画などの作品を鑑賞するのが好きだ。	.026	.528	-.028	.363
18 学校の国語の授業では、評論文よりも物語文の読解が得意だった。	.037	.487	-.003	.279
19 小説や映画などの登場人物に感情移入してしまい、自分のことのように嬉しくなったり悲しくなったりすることがある。	-.170	.760	.154	.253
21 小説や映画などのストーリーが、自分の人生にとって大きな意味を持つと感じることがある。	.052	.524	.217	.598
23 「最近あった身近な出来事」について、家族や友人に長々と話してしまうことがある。	.023	.167	.538	.409
24 家族や友人が、昔話や思い出話を語っているのを聞くのは楽しい。	-.078	.161	.446	.254
26 友人や知人についてのうわさ話をして盛り上がるのがよくある。	-.047	-.008	.707	.470
27 つい、人の昔話を聞き出そうとしてしまう。	-.062	-.041	.605	.322
30 自分の人生や人間性について語るとき、よく引き合いに出す過去のエピソードがある。	.216	-.124	.628	.478
固有値	5.932	4.611	3.586	
因子間相関	F1	F2	F3	
F1	—			
F2	0.436***	—		
F3	0.412***	0.433***	—	

***p<.01,**p<.05,*p<.1

d)物語志向性

川端らが使用した物語志向性尺度には、信頼性の低い項目が見られるなどの改善の余地が残されていた。そこで、仮説の検証に先立ち、既往研究における物語志向性尺度の信頼性や蓋然性を高めるために、web調査を通じて全国520名の男女に物語志向性尺度に関する30項目の質問を行った。因子分析（最尤法，プロマックス回転）の結果，物語志向性尺度として，他人を物語モードに入らせる上手さについての能力・傾向（以下，「物語誘引力」），自分自身が物語モードに入りやすいという能力・傾向（以下，「物語感得力」），他人と一緒に物語モードに浸ることで社会関係をうまく構築していく能力・傾向（以下，「物語共有傾向」）と解釈できる3因子が抽出され（表-6），各尺度の信頼性係数αはそれぞれ，.917，.831，.745と，良好な値が示された。以降の分析には，各因子を構成する項目の加算平均から，各尺度を構成し用いることとした（表-7）

表-7 信頼性分析結果と基本統計量

尺度	α	n	M	SD
物語誘引力	0.917	510	3.99	1.08
物語感得力	0.831	510	4.39	0.86
物語共有傾向	0.745	510	3.89	0.95

表-8 基本統計量

尺度	物語性有			物語性無		
	n	Mean	SD	n	Mean	SD
移入尺度	160	4.36	0.78	160	4.21	0.68
人物評価	160	4.88	1.17	160	4.65	1.08
納得性	160	4.72	1.05	160	4.48	0.91
関心向上性	160	4.63	1.11	160	4.40	0.92
自我関与性	160	4.71	1.15	160	4.58	0.89
物語誘引力	160	4.12	1.13	160	4.05	0.97
物語感得力	160	4.65	0.97	160	4.39	0.84
物語共有傾向	160	4.11	0.99	160	3.92	0.90
防災関心度_pre	160	4.38	1.23	160	4.44	1.00
防災政策必要性認識度_pre	160	4.81	1.28	160	4.77	1.12
許容防災税率_pre	160	4.10	1.2	160	3.34	8.02
防災関心度_post	160	4.77	1.11	160	4.66	1.00
防災政策必要性認識度_post	160	5.10	1.19	160	5.01	1.09
許容防災税率_post	160	5.78	1.5	160	3.94	8.29
防災関心度の増分	160	0.39	1.09	160	0.23	0.93
防災政策必要性認識度の増分	160	0.29	1.15	160	0.24	1.04
許容防災税率の増分	160	1.68	6.20	160	0.59	6.30

表-9 信頼性分析結果

尺度	α
社会問題関心度	0.837
防災関心度_pre	0.833
防災政策必要性認識度_pre	0.918
移入尺度	0.879
人物評価	0.927
納得性	0.814
関心向上性	0.859
自我関与性	0.858
物語誘引力	0.926
物語感得力	0.897
物語共有傾向	0.808
防災関心度_post	0.867
防災政策必要性認識度_post	0.922

5.実験結果

(1)データ整理

「防災関心度」「防災政策必要性認識度」「許容防災税率」に関しては，読了後のスコアから読了前のスコアを引いたものを，それぞれ「防災関心度の増分」「防災政策必要性認識度の増分」「許容防災税率の増分」と命名し，これらを「態度変容」の度合いを示す項目とし

て今後の実験では扱うこととした。なお、「許容防災税率」を除く尺度は「1点：全く当てはまらない」から「7点：非常に当てはまる」(ただし、逆転項目は、「7点：全く当てはまらない」から「1点：非常に当てはまる」)の7段階の得点の平均値を算出した。

(2)基本統計量と信頼性分析

移入、シナリオ読了効果、物語志向性、態度変容にの各尺度に関する平均値、標準偏差、信頼性係数を表-8および表-9に示す。

すべての尺度において信頼性係数 α が.750以上となり、良好な値であることが確認された。よって、以降の分析において、各分析尺度は質問項目によって得られた測定値の加算平均を用いることとした。

(3)仮説検証

a)仮説1：物語型コミュニケーションがシナリオ読了効果に及ぼす影響分析

まず、仮説1の検証を行う。シナリオ読了効果に対する物語型コミュニケーションの影響を検証するために、「シナリオ読了効果」「態度変容」を従属変数、「物語性の有無」を要因とした1要因分散分析を行った(表-10)。

分析の結果、シナリオ読了による効果のうち「人物評価」、「納得性」、「関心向上性」に対して物語性の主効果が有意となった(それぞれ、 $F(1,318)=3.31$, $p<.10$, $F(1,318)=5.01$, $p<.05$, $F(1,318)=4.05$, $p<.05$)。

以上の結果は、物語性のある文章に触れた場合、そうでない文章に比べて登場人物に対して好意的な評価を抱き、文章のテーマに対する納得や関心が向上することを示唆するものであり、仮説1を支持する結果と言える。

b)仮説2：物語型コミュニケーションおよび移入がシナリオ読了効果に及ぼす影響分析

次に、仮説2の検証を行う。最初に移入に対する物語型コミュニケーションの影響を検証するために、「移入尺度」を従属変数、「物語性の有無」を要因とした1要因分散分析を行った(表-11)。

分析の結果、移入による効果に対して物語性の主効果が有意となった($F(1,318)=3.52$, $p<.10$)。

次に、「移入尺度」と「シナリオ読了効果」「態度変容」の関係性を確認するために、各変数間の相関分析を行った(表-12)。分析の結果、「移入尺度」とすべての「シナリオ読了効果」との間に有意な強い正の相関($r=.577\sim.782$)が確認された。一方、「態度変容」のうち「防災関心度の増分」「防災政策必要性認識度の増分」と「移入尺度」間においても、弱い正の相関が見られた($r=.271\sim.281$)。

ここで、物語性の有無と移入の程度、読了効果の各因

子間の因果関係を検証するために、Lisrelを用いた共分散構造分析(パス解析)を行った。モデル及びパラメータの推定作業において、仮説2として指定した因果構造における3つの階層(図-1)を考慮し、ある階層の要因は、より下位の階層の要因に影響を受ける可能性はあるが、同階層の要因、または、より上位の階層の要因には影響を受けない、ということ为前提とした。加えて、表-12より、読了効果の4つの変数間の相関が確認されたことから、各変数間において誤差の共分散を想定した。以上の前提のもと推定した結果を表-13、表-14、図2に示す。このことから、モデル全体としてモデルの適合度に関する指標はいずれも良好な値を示していることが分かる($GFI=0.994$, $AGFI=0.967$, $CFI=0.189$,

表-10 物語性を要因とした1要因分散分析の結果

	物語性の主効果		
	F(n1,n2)=	F値	p
人物評価	F(1,318)=	3.314 *	0.070
納得性	F(1,318)=	5.012 **	0.026
関心向上性	F(1,318)=	4.052 **	0.045
自我関与性	F(1,318)=	1.224	0.269
防災関心度の増分	F(1,318)=	2.047	0.153
防災政策必要性認識度の増分	F(1,318)=	0.128	0.721
許容防災税率の増分(%)	F(1,318)=	2.394	0.123

***p<.01, **p<.05, *p<.1

表-11 物語性を要因とした1要因分散分析の結果

	物語性の主効果		
	F(n1,n2)=	F値	p
移入尺度	F(1,318)	3.506 *	0.062

***p<.01, **p<.05, *p<.1

表-12 物語性を要因とした1要因分散分析の結果

	移入尺度		
	相関係数		p
人物評価	.707	***	.000
納得性	.577	***	.000
関心向上性	.782	***	.000
自我関与性	.750	***	.000
防災関心度の増分	.271	***	.000
防災政策必要性認識度の増分	.281	***	.000
許容防災税率の増分(%)	.031		.576

***p<.01, **p<.05, *p<.1

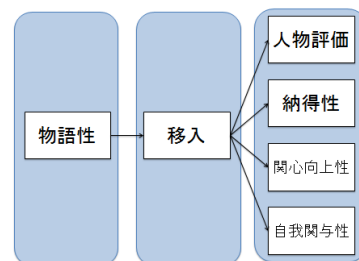


図-1 仮説2における3つの階層の想定

RMSEA=0.0404) . また、仮説で指定した因果関係は全て統計的に有意であった。

以上の結果は、物語性のある文章に触れた場合、そうでない文章に比べて移入の度合いが高まり、結果として文章の登場人物に対する評価が高まり、文章のテーマに対する関心や納得感が高まることを示唆するものであり、仮説2を支持する結果と言える。

c)仮説3：物語型コミュニケーションおよび物語志向性がシナリオ読了効果に及ぼす影響分析

最後に、仮説3の検証を行う。物語型コミュニケーションに対する物語志向性の影響を検証するために、「シナリオ読了効果」「態度変容」を従属変数、「物語性の有無」を要因、「物語誘引力」「物語感得力」「物語共有傾向」を共変量とした共分散分析を行った(表-15)。

分析の結果、「物語誘引力」と「物語性」の交互作用が「納得性」、「関心向上性」、「自我関与性」に対して有意となった(それぞれ、 $F(1,312)=6.51, p<.05$, $F(1,312)=9.53, p<.05$, $F(1,312)=5.96, p<.05$)。また、「物語共有傾向」と「物語性」の交互作用が「関心向上性」に対して有意となった($F(1,312)=4.82, p<.05$)。

次に主効果について見てみる。「物語誘引力」が「人物評価」に対して有意な主効果が見られた($F(1,312)=21.03, p<.01$)。「物語感得力」においては、「人物評価」「納得性」「関心向上性」「自我関与性」「防災関心度の増分」「防災政策必要性認識度の増分」に対して有意な主効果がみられた(それぞれ、 $F(1,312)=96.05, p<.01$, $F(1,312)=64.87, p<.01$, $F(1,312)=92.96, p<.01$, $F(1,312)=70.15, p<.01$, $F(1,312)=6.99, p<.01$, $F(1,312)=7.56, p<.01$)。「物語共有傾向」においては、「人物評価」「自我関与性」「防災関心度の増分」に対して有意な主効果が見られた(それぞれ、 $F(1,312)=3.47, p<.10$, $F(1,312)=10.35, p<.01$, $F(1,312)=4.37, p<.05$)。

以上の結果は、情報を物語化して表現し伝達したり説得したりする能力・傾向が高い人が物語性のある文章に触れた場合、文章のテーマに対する納得や関心や当事者意識が高まるということを示唆するものであり、物語志向性のうち「物語誘引力」においては、仮説3を支持するものである。

6.考察

(1)物語型コミュニケーションがシナリオ読了効果に及ぼす影響に関する考察

仮説1に関する分析の結果、物語性の強いシナリオに触れることによって、人々の当該テーマに関する人物評価や納得性、関心、自我関与性といった主観的心理が向上する効果を有するという本仮説1を支持されたものと

考えられる。

このことは、物語型の情報提示は、説明文型の情報提示に比べて人々の公共政策に対する関心や納得といった政治心理を醸成する上で有効なコミュニケーション手段であることを示唆する結果であり、物語型コミュニケーションの有効性に関する最も重要な知見であると考えられる。

ここで、川端ら¹⁴⁾の実験で用いたシナリオにおいて定義した物語の要素と、本実験のそれを比較すると、本実

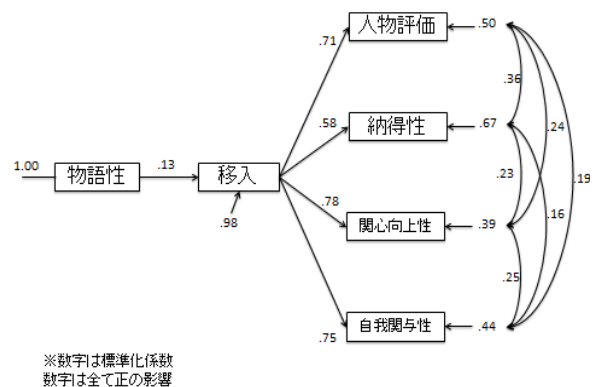


図-2 仮説2における因果構造の共分散構造分析の結果

表-13 共分散構造分析のモデル適合度

n	χ^2	df	p値	
320	19.7195	4	0.0006	
NFI	CFI	GFI	AGFI	RMSEA
0.9884	0.9907	0.9938	0.9672	0.04036

表-14 共分散構造分析の検定結果

		標準化係数	t値
物語性	⇒ 移入	0.131	2.94 ***
移入	⇒ 自己評価	0.706	8.35 ***
移入	⇒ 納得性	0.577	8.06 ***
移入	⇒ 関心向上性	0.781	9.28 ***
移入	⇒ 自我関与性	0.750	8.67 ***
*誤差の共分散			
人物評価	⇔ 納得性	0.358	5.70 ***
人物評価	⇔ 関心向上性	0.244	3.81 ***
人物評価	⇔ 自我関与	0.186	3.49 ***
納得性	⇔ 関心向上性	0.227	3.56 ***
納得性	⇔ 自我関与	0.164	3.23 ***
関心向上性	⇔ 自我関与	0.251	4.37 ***
誤差変数	⇒ 移入	0.983	17.25 ***
誤差変数	⇒ 人物評価	0.501	4.08 ***
誤差変数	⇒ 納得性	0.667	7.07 ***
誤差変数	⇒ 関心向上性	0.390	2.99 ***
誤差変数	⇒ 自我関与	0.437	3.35 ***

***p<.01, **p<.05, *p<.1

表-15 物語性を要因，物語志向性を共変量とした共分散分析の結果

	物語誘引力×物語性			物語感得力×物語性			物語共有傾向×物語性		
	F(n1,n2)=	F値	p	F(n1,n2)=	F値	p	F(n1,n2)=	F値	p
人物評価	F(1,312)=	1.259	.263	F(1,312)=	.043	.837	F(1,312)=	1.323	.251
納得性	F(1,312)=	6.508	**	F(1,312)=	.144	.704	F(1,312)=	.834	.362
関心向上性	F(1,312)=	9.531	***	F(1,312)=	.018	.893	F(1,312)=	4.820	**
自我関与性	F(1,312)=	5.961	**	F(1,312)=	.020	.888	F(1,312)=	.131	.718
防災関心度の増分	F(1,312)=	.447	.504	F(1,312)=	.501	.479	F(1,312)=	.343	.559
防災政策必要性認識度の増分	F(1,312)=	.077	.781	F(1,312)=	.444	.505	F(1,312)=	.243	.623
許容防災税率の増分	F(1,312)=	1.559	.213	F(1,312)=	.046	.830	F(1,312)=	.151	.698

***p<.01, **p<.05, *p<.1

	物語誘引力の主効果			物語感得力の主効果			物語共有傾向の主効果			物語性の主効果		
	F(n1,n2)=	F値	p	F(n1,n2)=	F値	p	F(n1,n2)=	F値	p	F(n1,n2)=	F値	p
人物評価	F(1,312)=	21.028	***	F(1,312)=	96.050	***	F(1,312)=	3.474	*	F(1,312)=	.036	.850
納得性	F(1,312)=	10.479	***	F(1,312)=	64.866	***	F(1,312)=	.953	.330	F(1,312)=	.850	.357
関心向上性	F(1,312)=	14.266	***	F(1,312)=	92.958	***	F(1,312)=	17.460	***	F(1,312)=	.929	.336
自我関与性	F(1,312)=	8.899	***	F(1,312)=	70.145	***	F(1,312)=	10.351	***	F(1,312)=	5.163	**
防災関心度の増分	F(1,312)=	.021	.886	F(1,312)=	6.994	***	F(1,312)=	4.366	**	F(1,312)=	.444	.506
防災政策必要性認識度の増分	F(1,312)=	.702	.403	F(1,312)=	7.562	***	F(1,312)=	.905	.342	F(1,312)=	2.595	.108
許容防災税率の増分	F(1,312)=	.408	.524	F(1,312)=	.094	.760	F(1,312)=	.937	.334	F(1,312)=	2.496	.115

***p<.01, **p<.05, *p<.1

験においては、川端らの実験で物語性の要素として定義していた「時間性」，「主体意図性」以外に，“物語に典型的に見られるような「目標達成-英雄物語型のプロット」の構造に従うように情報を配列する”という物語性の要素を加えた点が異なる。このことと、川端らの実験においては物語性の主効果が確認されなかった点を踏まえると、物語化の要素として、物語に典型的に見られる“「プロット」の構造に沿った情報の配列”の重要性が示唆されたものと考えられる。これは、物語化の手法に関する一つの知見を提供するものといえよう。ただし、上記の知見は、本研究で用いた「防災物語」における特有の結果である可能性を否定できず、今後、物語化の手法の一般化に向けては、更なる仮説検証を行うことが望まれることは言うまでもない。一方で、本調査が扱った黒潮町という特定の地域における防災物語がインターネット上の全国の被験者の関心や納得感を向上させる効果を有していた、という事実を踏まえるならば、本知見を物語化の手法の一つとして一般化しうる可能性もまた、否定できないものといえよう。

(2) 物語型コミュニケーションおよび移入がシナリオ読了効果に及ぼす影響に関する考察

仮説2に関する分析の結果、物語性と移入、シナリオ読了効果、政策態度との関係性について、政策態度に対する効果は明確には検出されなかったものの、シナリオ読了効果に対する影響、即ち、物語性が強いシナリオに触れると、その物語への移入が促され、テーマに関する人物評価、納得性、関心向上性、自我関与性といった読了効果が高まるという仮説は本実験において支持されたものと考えられる。

以上の結果は、公共政策に対する政治心理を醸成する

ために、公共政策に関する題材を物語化して伝えることの有効性を改めて支持すると同時に、その効果は人々の物語への移入の程度が強いほど高くなる可能性を示している。ここで、本仮説検証において、移入に対する物語性の主効果が有意であった点を勘案すると、公共政策に関する人々の政治心理を醸成する為には、当該政策に関する情報を、“「時間性」および「主体意図性」を強調し、目標達成-英雄物語型のプロットに沿うように配列する”という操作によって物語化することで、移入が生じやすくなり、当該政策に関する関心や納得感が向上する可能性が期待できるものと考えられる。

(3) 物語型コミュニケーションおよび物語志向性がシナリオ読了効果に及ぼす影響に関する考察

仮説3に関する分析の結果より、想定した3つの物語志向性のうち、「物語誘引力」において、仮説の妥当性が支持された。即ち、物語性が強いシナリオに触れたとき、「情報や考えを物語化して表現し伝達や説得をする能力・傾向」の高い人々は、当該テーマに対する「納得性」、「関心向上性」、「自我関与性」が高まる。この知見は、「物語誘引力」は他者に働きかける積極的な能力であるが、この能力はシナリオを読むという受動的な行為においても、その読了の効果を増大させる効果を持つということであると考えられる。このことから、「物語誘引力」が、自分自身に対する説得のような効果を持ち得ることが示唆されるといえる。

シナリオ読了効果に対する物語性と物語志向性の交互作用を見てみると、「物語誘引力」の高い人は納得や関心、自我関与性に対して交互作用が有意となっている。「物語共有傾向」については、関心向上性に対

する交互作用が有意となっている。一方、「物語感得力」については、物語性との交互作用は見られず、主効果が全てのシナリオ読了効果に対して強く有意となっている。これらの結果から、物語の効果に及ぼす影響は、3つの物語志向性の特徴によって異なることが分かる。即ち、物語誘引力は、3つの志向性の中で最も物語の効果に影響しやすく、物語誘引力の高い人は、説明文の情報よりも、物語型の情報を提示することによって、納得や関心、自我関与性が高まることが期待される。物語共有傾向の高い人は、説明文の情報よりも、物語型の情報を提示することによって、関心が高まることを期待されるが、物語共有傾向が低い人においては、物語型であっても、説明型であっても、関心向上性以外の向上は期待できない。

一方、物語感得力が高い人においては、物語性の有無にかかわらず納得や関心、自我関与性が期待される一方で、物語感得力が低い人においては、物語性のある情報を与えたところで、情報の主題に関する人物評価や納得、関心などのいずれも、向上は期待できないという可能性を示唆するものと考えられる。

以上から、情報に対する関心や納得などを持ってもらうためには、まず、「物語感得力」を醸成することが必要であると考えられる。その上で、「物語誘引力」や「物語共有傾向」を醸成することで、物語型情報に触れた際のシナリオ読了効果が一層高まることを期待することができるものと考えられる。

7.結論

本研究では、公共政策における人々の政治心理の醸成に対する物語型コミュニケーションの有効性を明らかにすることを目的として、3章で述べた3つの仮説を検証した。その結果、物語性の強いシナリオに触れることによって、人々の当該テーマに関する人物評価や納得性、関心、自我関与性といった主観的心理が向上する効果を有すこと、そして、その過程において、移入という心的プロセスが重要な役割を演じている可能性、さらに、物語化の効果は、「情報や考えを物語化して表現し伝達や説得をする能力・傾向」の高い人々において有効であるという可能性の存在がそれぞれ、実証的に明らかとなった。そして、本研究によって、物語の要素として、文章の構造が重要な意味を持つ可能性が示唆された。

以上の本研究の成果を踏まえると、公共政策における物語の活用可能性として、次のようなことが考えられる。

第一に、公共政策の必要性を住民に説明する際の例として道路事業を上げると、当該事業効果の説明においては、データやグラフを用いた時間短縮効果や環境負荷

の低減等の断片的な情報提供が行われるケースが多いが、このような場合に、それぞれの情報に物語性を持たせた説明を行うことにより、住民により関心や納得感を持ってもらうことができ、活発な議論が可能となり円滑な合意形成がなされる可能性が高まることが期待される。

第二に、本研究における物語型コミュニケーションは、黒潮町のような先進的な防災の取り組みの成功事例を、全国に共有化する際の情報提示の手法として有効であるものと考えられる。この際、住民側だけでなく、政策実行者側も物語描写に触れることが極めて重要な意味をもつものと考えられる。今回の例で見れば、黒潮町に置ける防災の取り組みの物語描写に他の市町村の首長が触れることによって、黒潮町長の防災意識に対する思想を共有することができるものと考えられる。

第三に、物語的な記述を読了することは、土木技術者への知識教育や倫理教育に繋がるとの指摘があり³⁵⁾、本研究において用いられたような物語化の手法を活用できる可能性があるものと考えられる。

こうした物語の実践的活用に向けて、今後は、本研究で扱っていない他のシナリオ読了効果の存在の妥当性や、本研究で十分に明らかとならなかった「防災関心度の増分」や「防災政策必要性認識度の増分」といった態度変容の効果について、更なる検証を行うことが望まれる。さらに、前述したとおり、情報を「物語化」する手法についても、多様な題材を用いた更なる実証的検証が必要と考えられる。

付録

物語型シナリオ

タイトル「高知県・黒潮町の大津波対策」

地震対策への「あきらめ」

黒潮町は、高知県の西部に位置する人口約1万2000人の海沿いの町である。町は太平洋に面しており、90～150年周期で発生する南海地震によって、大きな津波被害を受けてきた歴史がある。南海地震は、今後30年以内に90%程度の確率で発生すると予想されており、大規模な被害が懸念されている。

2011年3月11日、東北地方を中心とする東日本大震災が発生した。報道される津波被害のあまりの大きさに、遠く離れた黒潮町の人々も、人ごととは思えず大きなショックを受けた。

それから20日後の3月31日、今度は政府の中央防災会議が、南海地震についての被害予想を発表。最大震度は7、最短2分で到達する黒潮町の津波の高さは、街のほとんど全てを押し流す「最大34.4m」と予想された。この報道を受けた黒潮町では、「南海地震が来たら、助かるわけがない」というあきらめの声が瞬間に広がったという。

大西町長の決意

黒潮町の大西勝也町長は、前年に39歳の若さで就任した気鋭の政治家である。彼もまた、他のすべての町民と同様に、中央防災会議の発表を知った途端に絶望的な心持ちとなったという。

発表があった3月31日は土曜日で、日曜日には町へ取材が殺到。翌月曜日は、新年度の仕事始めている。町長は「リーダーたる自分がここであきらめれば、町そのものが文字通り津波で消滅する」と考えて、日曜日の夜に「1人の人間も絶対殺さないための防災体制を作り上げる」という決意を固め、1枚の「訓示文」をしたためた。

そして月曜日の朝、役場の全職員に向けて「どうしても無いとあきらめるような発言は、その一切を禁止する」と述べ、「困難な道の中にはなるが、職員一同の奮起を要請する」で締めくくられる訓示文を力強く読み上げた。すると、あきらめムードが広がりつつあった町役場で、防災に向けた士気が一気に高まったという。

黒潮町の防災思想

その後大西町長は、まず、役場職員たちとともに確固たる「防災思想」を打ち立てることを目指した。そして5月10日、町役場は「第1次黒潮町の南海地震に対する基本的な考え方」を発表し、これが町としての防災思想の基本原則となった。この思想の根本に据えられたのは、「避難放棄者を出さない」という目標だった。

町役場の人手不足

ただし、思想や目標を示すだけで、住民からあきらめの気持ちが払拭されるわけではない。大西町長は、「住民の気持ちを前向きにするには、目に見える形の取り組みを素早く打ち出すことが大事だ」と考え、「避難道の整備」など具体性のある事業にすぐに取りかかることにした。

しかし「避難放棄者ゼロ」を目指すには膨大な取り組みが必要だ。これは町の防災担当職員の手にも負える仕事ではなかった。

全職員が防災担当者

すると役場内から「防災には町役場の全職員の力で取り組むべきではないか」との声が上がった。町長はその声をすぐに採用。全職員が地域別に担当を受け持つ「職員地域担当制」が導入された。

保育園の職員まで含めて、町役場の「全ての職員」が何らかの形で防災担当者となったのである。これはもちろん、各職員の業務量が増えることを意味しているが、反対の声は1つも出なかったという。

防災予算の不足

この制度の下、町内が61の地区に分けられ、全職員がどこかの地区の担当となった。それぞれの地区で防災のためのワークショップを開催し、役場職員と住民が一緒になって危険な場所を特定し、そのための防災事業を1つ1つ検討していった。

しかし役場の試算によると、防災事業を全て実行するには約33億円の予算が必要になることが分かった。黒潮町単独では、とても負担できる金額ではなかった。

国への働きかけ

そこで大西町長は、財政支援を獲得するために国へ働きかけることに

した。月に2回程度は東京へ行き、国交省などに黒潮町の実情を伝え、地方の防災活動を国が支援することの必要性を訴えた。また、すでにある国の補助制度などの情報も丹念に収集した。

その結果、町長の努力は実り、その年の秋の補正予算で、黒潮町の避難場所や避難道の整備に必要な事業費が確保されることとなった。

こうして具体的な作業が動き出し、避難道の整備などが進むにつれて「実際に逃げる時のイメージ」が思い描けるようになり、住民の「あきらめ」の気持ちも次第に緩和されていった。当初とは違って、「逃げよう」という意識を持つ住民が着実に増えてきたのである。

目標の引き上げ

さらに作業を進めた黒潮町は、1年ほどが経過した2013年1月31日に「第2次黒潮町南海地震・津波防災計画の基本的な考え方」をとりまとめた。そしてその際、防災の基本目標を、以前の「避難放棄者ゼロ」から「犠牲者ゼロ」へと引き上げた。

犠牲者「ゼロ」を目指すには、文字通り「全て」の住民が必ず逃げられるという確信を持つことが必要だ。しかしそれは相当に高いハードルだった。

住民1人1人の「避難カルテ」

そこで黒潮町役場は、全ての住民について、1人1人個別に「どうやって避難するか」を考えた「避難カルテ」を作成することにした。その作成にあたっては「職員地域担当制」が活用された。すなわち、各地区の担当職員が、全ての住民とワークショップで直接細やかな相談をしながら、1人1人のカルテを作っていくのである。

このカルテの効果は絶大だった。住民1人1人が、「ここに行けば助かる」という明確なイメージを持てるようになった。そして役場は、これに基づいて町全体の避難計画のシミュレーションが綿密に行えるようになったのであった。

「逃げない」から「あきらめない」へ

こうした役場主導の防災の取り組みを進めているうちに、自主的に防災組織を結成して地域の避難路確保に励む住民も現れ始めた。また、学校や保育所など教育現場でも、震災に関する教育や避難訓練などの取り組みが活発に行われるようになった。

町役場の松本課長は、「当初は『逃げない』という声が多かったが、今は逆にそれが恥ずかしい状況になってきている」と語る。大西町長も「今ではほとんど、あきらめの声はない」と言い、町を挙げたここ数年の取り組みが実を結んでいることがわかる。

ゆるやかな防災

いつ起きるか分からない地震に備えるには、取り組みを長く継続することこそが大事である。しかし防災というのは過酷な取り組みだ。大西町長は、「常に被害をイメージするような、辛い精神作業は続かない」「新しい避難道にちょっと登ってみようかなぐらいの感覚でなければ長続きはしない」という。松本課長も、「南海地震と向き合うのではなく、付き合うという感覚が大事だろう」という。

町長が「絶対にあきらめない」と決意したあの夜から始まった黒潮町

の防災の取り組みは今、こうした「ゆるやかな防災」という形で、町全体にじっくりと浸透しつつあるのだった。

説明文型シナリオ

タイトル「高知県・黒潮町の津波対策」

防災の取り組みが進む黒潮町

黒潮町は、高知県の西部に位置する人口約1万2000人の海沿いの町である。町長は2010年に39歳の若さで当選した気鋭の政治家、大西勝也氏が務めている。

町は太平洋に面しており、90～150年周期で発生する南海地震によって、大きな津波被害を受けてきた歴史がある。南海地震は、今後30年以内に90%程度の確率で発生すると予想されており、大規模な被害が懸念されている。

2011年3月11日、東北地方を中心とする東日本大震災が発生した。報道される津波被害のあまりの大きさに、遠く離れた黒潮町の人々も、人ごととは思えず大きなショックを受けた。

3月31日、政府の中央防災会議が、南海地震についての被害予想を発表。最大震度は7、最短2分で到達する黒潮町の津波の高さは、街のほとんど全てを押し流す「最大34.4m」と予想された。この報道を受けた黒潮町では、「南海地震が来たら、助かるわけがない」「地震が来ても逃げない」というあきらめの声が瞬く間に広がった。町へは、県外からの取材も殺到した。

しかし今の黒潮町では、「諦めるのは恥ずかしい」という状況である。町内にはほとんどあきらめの声はない。役場主導の防災の取り組みが進むのと同時に、自主的に防災組織を結成して地域の避難路確保に励む住民も現れ始めている。学校や保育所など教育現場でも、震災に関する教育や避難訓練などの取り組みが活発に行われるようになってきている。

具体的な取り組み例

この変化は、町を挙げたここ数年の取り組みの結果もたらされたものであり、以下に3つ取り組みの例を挙げる。

取り組み1: 黒潮町役場においては、全職員が地域別に担当を受け持つ「職員地域担当制」が導入されている。保育園の職員まで含めて、町役場の「全ての職員」が何らかの形で防災担当者となっているのである。これはもちろん、各職員の業務量が通常よりも増えることを意味しているが、反対の声は1つも出ていない。

取り組み1の背景: 南海地震の被害予想発表後、黒潮町役場は「南海地震において、避難放棄者を出さないこと」を目標に掲げた。しかし「避難放棄者ゼロ」を目指すには膨大な取り組みが必要で、これは町の防災担当職員の手にも負える仕事ではないため、「防災には町役場の全職員の方で取り組むべきではないか」との考えから職員地域担当制が導入された。

取り組み2: 2011年秋の国の補正予算で、黒潮町の避難場所や避難道の

整備に必要な事業費が確保された。この財政支援を受けて、黒潮町では具体的な作業が動き出し、避難道などが整備された。

その結果「実際に逃げる時のイメージ」が思い描けるようになり、住民の「あきらめ」の気持ちも次第に緩和された。当初とは違って、「逃げよう」という意識を持つ住民が着実に増えた。

取り組み2の背景: 国の財政支援は、黒潮町から国への働きかけによって獲得されたものである。月に2回程度は東京へ赴き、国交省などに黒潮町の実情を伝え、地方の防災活動を国が支援することの必要性を訴えた。また、すでにある国の補助制度などの情報も丹念に収集した。国に働きかけたのは、黒潮町に必要な防災事業の予算額が、黒潮町単独ではとても負担できる金額ではなかったからである。その金額は、次のような手順で見積もられた。町内が61の地区に分けられ、それぞれの地区で防災のためのワークショップが開催され、役場職員と住民が一緒になって危険な場所を特定し、そのための防災事業を1つ1つ検討した。そして経費の金額を役場が試算すると、総額で約33億円となった。

取り組み3: 黒潮町役場は、全ての住民について、1人1人個別に「どうやって避難するか」を考えた「避難カルテ」を作成している。このカルテの効果は絶大で、これを通して住民1人1人が「ここに行けば助かる」という明確なイメージをもつことができる。また町役場は、これに基づいて町全体の避難計画のシミュレーションを綿密に行うことができる。

取り組み3の背景: 避難カルテの作成は、2013年1月31日の「第2次黒潮町南海地震・津波防災計画の基本的な考え方」の公表を受けて始められた。この「基本的考え方」では、防災の基本目標が以前の「避難放棄者ゼロ」から「犠牲者ゼロ」へと引き上げられた。犠牲者「ゼロ」を目指すには、文字通り「全て」の住民が必ず逃げられるという確信を持つことが必要だ。しかしそれは相当に高いハードルだった。このハードルを越えるために、「職員地域担当制」を活用して、地区の担当職員が全ての住民とワークショップで直接細やかな相談をしながら1人1人のカルテを作成した。

黒潮町の取り組みを支えるもの

以上のような取り組みの全てを支える背景として、次の3つを挙げることができる。

全体的背景1: 中央防災会議による南海地震の被害予想発表の後、町長から黒潮町役場の全職員に向けて、「どうしようも無いとあきらめるような発言は、その一切を禁止する」とし、「困難な道にははなるが、職員一同の奮起を要請する」で締めくくられる訓示文が読み上げられた。その結果、あきらめムードが広がりつつあった町役場で、防災に向けた士気が一気に高まった。

町長もまた、他のすべての町民と同様に、中央防災会議の発表を知った途端に絶望的な心持ちとなっていた。しかし町長は「リーダーたる自分がここであきらめれば、町そのものが文字通り津波で消滅する」

と考えて、「1人の人間も絶対殺さないための防災体制を作り上げる」という決意を固め、「訓示文」をしたためたのであった。

全体的背景2: 南海地震の被害予想発表の直後に黒潮町では、まず確固たる「防災思想」を打ち立てることが目指された。そして役場から「第1次黒潮町の南海地震に対する基本的な考え方」が発表され、これが町としての防災思想の基本原則となった。この思想の根本に据えられたのは、「避難放棄者を出さない」という目標である。ただし、思想や目標を示すだけで、住民からあきらめの気持ちが払拭されるわけではない。住民の気持ちを前向きにするには、目に見える形の取り組みを素早く打ち出すことが大事であるため、町役場は「避難道の整備」など具体性のある事業にすぐに取りかかることにした。

全体的背景3: いつ起きるかわからない地震に備えるには、取り組みを長く継続することこそが大事である。しかし防災というのは過酷な取り組みだ。常に被害をイメージするような、辛い精神作業は続かないものであり、「新しい避難道にちょっと登ってみようかな」ぐらいの感覚でなければならない。

黒潮町では、「南海地震と向き合うのではなく、付き合う」という感覚が大事であるとされており、こうした「ゆるやかな防災」という形で、各種取り組みが町全体にじつくりと浸透しつつある。

参考文献

- 1) 秋吉貴雄, 伊藤修一郎, 北山俊哉: 公共政策学の基礎, 有斐閣ブックス, 有斐閣, 2010.
- 2) 藤井聡: 公共事業が日本を救う, 文春新書, 文藝春秋, 2010.
- 3) 菅野雄介: 八ツ場ダムとは, 2014/11/27 アクセス, <http://www.asahi.com/topics/八ツ場ダム.php>.
- 4) 藤井聡: 社会的ジレンマのための処方箋・都市・交通・環境問題のための心理学, ナカニシヤ出版, 2003.
- 5) 土木学会誌編集委員会(編): 合意形成総論賛成・各論反対のジレンマ, 社団法人土木学会, 2004年.
- 6) 田中皓介, 神田佑亮, 藤井聡: 公共政策に関する大手新聞社報道についての時系列分析, 土木学会論文集D3(土木計画学), Vol. 69, No. 5.
- 7) 羽鳥剛史, 藤井聡, 水野絵夢: 政府の公共事業を巡る賛否世論の政治心理学的分析, 交通工学, Vol. 44, No. 5, pp. 55-65, 2009.
- 8) Green, M. C., Brock, T. C.: The role of transportation in the persuasiveness of public narratives, *Journal of Personality and Social Psychology*, 79(5), pp. 701-721, Nov2000.
- 9) Thorndyke, P. W.: Cognitive structures incomprehension and memory of narrative discourse, *Cognitive Psychology*, Volume9Issue1, pp. 77-110, 1977.
- 10) 斎藤清二(編): N: ナラティブとケア第1号特集: ナラティブ・ベイスト・メディスンの展開, 遠見書房, 2010.
- 11) 浅野智彦: 自己への物語論的接近—家族療法から社会学へ, 勁草書房, 2001.
- 12) 森美保子, 福島脩美: 心理臨床におけるナラティブと自己に関する研究の動向, 目白大学心理学研究, 第3号, pp. 147-167, 2007.
- 13) Denning, S.: Effective storytelling: strategic business narrative techniques, *Strategy and Leadership*, vol. 34 no. 1, pp. 42-48, 2006.
- 14) 川端祐一郎, 浅井健司, 宮川愛由, 藤井聡: ナラティブ型コミュニケーションが公共政策をめぐる政治心理に与える影響の研究, 土木計画学研究・講演集, Vpl. 49, 2014.
- 15) 野口裕二(編): ナラティブ・アプローチ, 勁草書房, 2009.
- 16) アリストテレース, ホラーティウス, (松本仁助, 岡道男訳): :詩学詩論, 岩波書店, 1997.
- 17) やまだようこ(編著): 人生を物語る——生成のライフストーリー, ミネルヴァ書房, 2000.
- 18) Hinchman, L. P. and Hinchman, S. K. (eds.): *Memory, Identity, Community: the idea of narrative in the human sciences*, New York: State University of New York, 1997.
- 19) Joseph Campbell, 平田武靖・浅輪幸夫(監): 千の顔をもつ英雄, 人文書院, 1984.
- 20) Bruner, J.: *Actual Minds, Possible Worlds*, Boston: Harvard University Press, 1986. (ブルーナー, J. (田中一彦訳): 可能世界の心理, みすず書房, 1998.)
- 21) Labov, W. and Waletzky, J.: Narrative analysis: oral versions of personal experience, *Journal of Narrative & LifeHistory*, Vol7(1-4), pp. 3-38, 1997(original: 1968).
- 22) Thorndyke, P. W.: Cognitive structures incomprehension and memory of narrative discourse, *Cognitive Psychology*, Volume 9 Issue1, pp. 77-110, 1977.
- 23) Propp, V. (Author), Wagner, L. A. (Editor), Scott, L. (Translator): *Morphology of the Folktale*, 2nd edition, Amazon Kindle edition, Austin: University of Texas Press, 2010(original:1927).
- 24) 箱田裕司, 都築誉史, 川畑秀明, 萩原滋: 認知心理学, 有斐閣, 2010.
- 25) Zwaan, R. A., & Radvansky, G. A.: Situation models in language comprehension and memory. , *Psychological Bulletin*, 123, 162-185, 1998.
- 26) León, J. A., & Peñalba, G. E.: Understanding causality and temporal sequences in scientific discourse. In J. Otero, J. A. León, & A. C. Graesser(Eds). , , *The psychology of scientific text comprehension*. , Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. , pp. 155-178, 2002.
- 27) 井関龍太, 川崎恵里子: 物語文と説明文の状況モデルはどのように異なるか:5つの状況的次元に基づく比較教育心理学研究教育心理学研究 54(4), 464-475, 2006-12-30 日本教育心理学会.
- 28) Zwaan, R. A., Magliano, J. P., and Graesser, A. C.: Dimensions of situation model construction in narrative comprehension, *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 21(2), pp. 386-397, 1995.
- 29) Zwaan, R. A., & Brown, C. M.: The influence of language proficiency and comprehension skill on situation-model construction, *Discourse Processes*, 289-327, 1996.
- 30) 藤井聡, 意思決定における物語の役割, 行動計量学

- 会第 39 回大会抄録集, 2011.
- 31) 藤井聡:景観改善の「物語」とその「伝染」について, 都市計画, 57(6), pp. 21-24, 2008.
- 32) 夏山英樹, 藤井聡, 東日本大震災における「くしの歯作戦」についての物語描写研究, 土木計画学研究・講演集, CD-ROM, 45, 2012.
- 33) 佐藤翔紀, 神田佑亮, 藤井聡, 高知県黒潮町におけるレジリエンス確保のための防災行政についての物語描写研究, 土木計画学研究・講演集, CD-ROM, 49, 2014.
- 34) 文部科学省: 高等学校学習指導要領解説国語編, 2010
- 35) 長谷川大貴, 中野剛史, 藤井聡:土木計画における物語の役割に関する研究(その1)-プランニング組織支援における物語の役割-, 土木計画学研究・講演集, 2011, CD-ROM, vol. 43, 2011

AN EXPERIMENTAL STUDY ON HOW “NARRATIVEFORM” OF INFORMATION
CHANGES PEOPLE’S ATTITUDE TOWARD PUBLIC POLICY

Yuki TAKAHASHI, Yuichiro KAWABATA, Ayu MIYAKAWA, Satoshi FUJII